

大田区自然観察路「川と干潟のみち」の
生物・植物についての区民協働調査

実施報告書

2019年3月

一般社団法人

地域パートナーシップ支援センター

〈 報告内容 〉

1. 調査実施概要

1. 1 調査名称

1. 2 調査目的

1. 3 調査地域

1. 4 調査項目

1. 5 調査期間

1. 6 調査方法

1. 7 調査員

1. 8 写真撮影

1. 9 報告書作成者

2. 調査結果

2. 1 「川と干潟のみち」と調査コースについて

2. 2 調査コース概要

2. 3 本調査 植物・樹木調査

2. 4 本調査 生物調査 〈野鳥〉

2. 5 本調査 生物調査

〈昆虫、哺乳類、爬虫類、両生類、魚類、その他〉

2. 6 協働調査 〈区民参加による調査普及活動〉

1. 調査実施概要

1. 1 調査名称

大田区自然観察路「川と干潟のみち」の生物・植物についての区民協働調査

1. 2 調査目的

自然観察路「川と干潟のみち」は、六郷橋から東に広がる多摩川河川敷と大師橋付近の干潟を観察するコースであり、特色のある自然環境が存在する。この調査報告書は、自然観察路を中心とした生物相の状況を把握し、区民等が自然観察を行う際の資料として提供するだけでなく、今後区民と協働して行う自然環境及び環境保全施策の基礎として利用できるようにする。

そして、過去に行った調査結果と比較して生物相の変化状況を把握し、気候変動、その他の環境の変化を推察する資料とする。

また、本調査を区民と協働で実施することにより、区民に大田区の環境に関心を持ってもらい、生物多様性の理解促進を図った。

1. 3 調査地域



大田区自然観察路「川と干潟のみち」（多摩川沿い六郷橋から大師橋を経て、海老取川との分岐点まで）の指定部分

1. 4 調査項目

- (1) 植物（樹木、草本）
- (2) 鳥類
- (3) その他（昆虫類、哺乳類・爬虫類・両生類・魚類、陸産貝類など）

1. 5 調査期間

2018年4月18日～2019年3月20日

この期間内に本調査および区民参加による協働調査（観察会）を実施

1. 6 調査方法

本調査

調査地域内で確認された個体について数、種類を記録する。ただし、識別不能な個体については可能な範囲で記録をとる。

確認した生物、植物および調査場所の環境をデジタルカメラで写真撮影し記録する。

協働調査

調査内容、方法について検討し、参加する区民に対して調査方法、識別方法の説明を行い、本調査に準じた区民参加の調査を行う。

1. 7 調査員

専門調査員

川沢祥三、大塚 豊（野鳥）
山辺功二、鈴木百合子（植物、樹木）
片岡和夫（干潟の生物情報提供）
小野紀之（総括）

区民参加調査員

8月 11日 区民22名
12月 9日 区民14名

1. 8 写真撮影

大塚 豊、鈴木百合子、山辺功二、小野紀之

1. 9 報告書作成者

小野紀之、山辺功二

2. 調查結果

本調査は、植物・樹木、野鳥の2分野について実施した。植物・樹木は専門調査員による定期調査を4回（4月、7月、10月、1月）実施。ただし、1回の定期調査では調査不可能なため、それぞれの時期に複数回の調査を実施した。野鳥も専門調査員によって定期調査を4回実施した。干潟の生物については、干潟での定期活動を行っている方から情報提供をしてもらった。

協働調査は、参加した区民の身近な環境、生き物への関心を高めることを目的に多摩川大師橋干潟周辺地域で観察会を夏期、冬期に各1回実施した。

*アシとヨシの表記について・・・元の名はアシ。標準和名はヨシ。アシは「悪し」に通じて縁起が悪いとして「良し」に反転してヨシと呼ばれるようになった。現在でも両方が併用されていることが多いことから（アシ原、アシハラガニ、葦簀（よしず）など）、本報告書でも併用している。

2. 1 「川と干潟のみち」と調査コースについて

大田区では1987（昭和62）年発行パンフレットで大田区内の5ルート of 自然観察路の紹介を行っている。「川と干潟のみち」は京浜急行線六郷土手駅から多摩川河川敷を通り、京浜急行バス大師橋下停留所までのコースであった。

今回、大師橋から多摩川と海老取川の分岐点である五十間鼻まで調査コースを延長し、大田区自然観察路「川と干潟のみち」とした。



「大田区の自然観察路」 平成7年3月発行パンフレットより

2. 2 調査コース概要

今回の調査では、「川と干潟のみち」を上流側から3つのエリアに分けて調査記録を行った。しかしながら、地形の特徴としては(1)グラウンド・公園・堤防 (2)河岸隣接帯 (3)潮間帯 に大きく分けられる。

「川と干潟のみち」は大田区を代表する水辺、湿地であり、アシ群落を中心とした広大な自然草原を形成し、また、広い多摩川河口干潟が存在している。六郷橋下流は東京湾に近く、潮汐の影響を強く受けるため、潮間帯が広く分布し、干潟や塩性湿地が発達している。一面アシ原の広大な自然が手の届くところにあり、植生のみならず生態系の観察に最適である。

六郷橋から大師橋の間の大田区多摩川河川敷は、河水面より比較的高いところでは、緑地公園としてグラウンドや草地として管理されている。グラウンド・草地は広く、40数ヘクタールあり、潮間帯と緑地等との間の河岸隣接帯も同じく40数ヘクタールある。そのうち、植生のない干潟は15ヘクタールほど存在している。また、河岸隣接帯には、一部(六郷橋直下流、大師橋直上流)に河畔林があり、ヤナギやオニグルミ、エノキ、タケなどが繁茂している。

① 六郷橋～六郷水門

このエリアの河川敷は緑地としてゲートボール場、テニスコート、少年野球場などが整備され、休日にはスポーツをする人たちでにぎわっている。また、堤防上の道路は車の進入が禁止されているため、サイクリングやマラソン、ジョギングに利用されている。緑地広場に隣接する河岸隣接帯は、多摩川のアシ群落との間に水路が形成されていて潮汐の影響で干潟が現れる。六郷橋直下流には河畔林がある。



② 六郷水門～大師橋

六郷水門直下流の干潟は最近、アシが生育して縮小傾向にある。大師橋緑地野球場の河岸隣接帯は、大師橋干潟、その上流側のアシ群落と共に多様な生態系を形成しており、最も豊かな湿地環境を保っている。



③ 大師橋～五十間鼻（海老取川分岐点）

大師橋下流は、河川敷としては20～30メートルの幅の河岸隣接帯と僅かな干潟があるにすぎない。



2. 3 本調査 植物・樹木調査

今回の調査では「川と干潟のみち」を、(1) グラウンド・公園・堤防 (2) 河岸隣接帯 (3) 潮間帯 に分け、それぞれに生育する植物・樹木について調査集計を行った。

大田区自然観察路「川と干潟のみち」の代表的な樹木



河畔林 (六郷橋直下)



河畔林 (本羽田付近)



アカメガシワ



ハゼノキ



カラスザンショウ



ムクロジ



オニグルミ



エノキ



ピラカンサ



クヌギ

大田区自然観察路「川と干潟のみち」の代表的な草本類



グンバイナズナ



ウシハコベ



セイバンモロコシ



クサギ



ヒルガオ



カラクサナズナ



ハマダイコン



アレチウリ



ウラギク



オオオナモミ



セイタカアワダチソウ



オギ



ガマ



アシ (ヨシ)

2018年度「川と干潟のみち」植物調査 確認された種名表

<樹木類>

科目	種名	グラウンド・公園・堤防								河岸隣接部										備考				
		上流部				下流部				上流部				下流部				河口部						
		4月	7月	11月	2月	4月	7月	11月	2月	4月	7月	11月	2月	4月	7月	11月	2月	4月	7月		11月	2月		
ウコギ	キツタ																							
キヨウチクトウ	キヨウチクトウ						(花)																	
クスノキ	クスノキ																							
クルミ	オニグルミ										(実)				(実)									
クワ	ヤマグワ																							
グミ	ナワシログミ																							
スイカズラ	ハナソノツクバネウツギ						(花)																	
ツツジ	ヒラドツツジ																							
ツバキ	ヤブツバキ																							
トウダイグサ	アカメガシワ										(花)				(花)					(花)				
トベラ	トベラ		(花)				(花)													(花)				
ニガキ	シンジュ																							
ニシキギ	マサキ																							
ニレ	アニキレ															(花)								
	エノキ																							
	ケヤキ																							
バラ	シャリンバイ																							
	タチバナモドキ											(実)			(実)									
	ビワ																							
ブナ	シラカシ																							
	マテバシイ																							
マツ	クロマツ																							
マメ	ハリエンジュ																							
モクセイ	トウネズミモチ										(花)	(実)			(花)	(実)			(花)	(実)				要注意外来種
	ネズミモチ										(花)	(実)			(花)	(実)								
モチノキ	イヌツゲ																							
ヤシ	シュロ																							
ヤナギ	シダレヤナギ																							
	タチヤナギ																							
	合計	2科 2種				5科 5種				12科 17種				17科 21種				10科 10種						
	22科 29種																							

2018年度「川と干潟のみち」植物調査 確認された種名表

<草本類> 1/2

科名	種名	グラウンド・公園・堤防								河岸隣接部								備考				
		上流部				下流部				上流部				下流部					河口部			
		4月	7月	11月	2月	4月	7月	11月	2月	4月	7月	11月	2月	4月	7月	11月	2月		4月	7月	11月	2月
アカザ	シロザ																					
	ホソバノハマアカザ									(種)												
	ホコガタアカザ									(種)												
アカネ	ヤエムグラ																					
	ヘクソカズラ									(花)								(花)				
アカバナ	メマツヨイグサ																					要注意外来種
アブラナ	カラシナ									(花)								(花)				
	ナズナ									(花)								(花)				
	ハマダイコン									(花)								(花)				
	マメゲンバイナズナ									(花)								(花)				
アヤメ	ニワゼキショウ																	(花)				
イグサ	イ																					潮間帯
	クサイ									(種)	(種)							(種)	(種)			
イネ	アイアシ											(種)						(種)				
	アズマネザサ																					
	エノログサ		(種)	(種)								(種)	(種)					(種)	(種)		(種)	(種)
	オギ											(種)	(種)	(枯)				(種)	(種)	(枯)		
	オニウシノケグサ									(種)	(種)	(種)						(種)	(種)	(種)		
	オヒシバ											(種)	(種)					(種)	(種)			
	カゼクサ									(種)								(種)				
	カモシグサ									(種)								(種)				
	カラスムギ									(種)	(種)							(種)	(種)			
	キンエノコロ												(種)					(種)				
	シバ																					
	ススキ												(種)	(枯)				(種)	(枯)			
	スズメガヤ																	(種)				
	スズメノチャヒキ									(種)	(種)							(種)	(種)			
	セイシモノロコシ		(種)	(種)								(種)	(種)	(枯)				(種)	(種)	(枯)	(種)	(種)
	テカラシバ			(種)														(種)	(種)		(種)	
	チガヤ									(種)								(種)				
	ネズミムギ									(種)								(種)				
	マダケ																					
	ミノボロ																	(種)				
	メダケ																					
	メヒシバ		(種)	(種)														(種)	(種)		(種)	(種)
	ヨシ																	(種)	(種)	(枯)		潮間帯
ウリ	アレチウリ												(花)					(花)				特定外来種
オオバコ	オオバコ		(花)							(花)								(花)			(花)	
	ヘラオオバコ		(花)	(花)						(花)	(花)							(花)	(花)		(花)	要注意外来種
カタバミ	カタバミ		(花)	(花)						(花)	(花)							(花)	(花)		(花)	
カヤツリグサ	イセウキヤガラ																	(種)				潮間帯
	メリケンカヤツリグサ									(種)	(種)							(種)	(種)			要注意外来種
ガマ	ガマ											(種)										潮間帯
クク	アメリカセンダングサ												(花)					(花)				要注意外来種
	アレチハナガサ												(花)					(花)			(花)	
	イワニガナ																	(花)	(花)		(花)	
	オオアレチノギク									(花)	(花)							(花)	(花)		(花)	要注意外来種
	オオナオモミ																			(実)	(実)	
	オニタラビコ									(花)								(花)				
	ククイモ												(花)					(花)				
	セイタカアワダチソウ																			(花)	(花)	要注意外来種
	セイヨウタンポポ		(花)	(花)						(花)	(花)							(花)	(花)		(花)	要注意外来種
	ハルジオン		(花)							(花)								(花)			(花)	要注意外来種
	ヒメジオン			(花)									(花)					(花)			(花)	要注意外来種
	ホウキギク									(花)												
	ノゲシ									(花)	(花)							(花)	(花)		(花)	
	ノブキ																					
	ヨメナ																	(花)		(花)		
	ヨモギ																	(実)		(実)		

1. グラウンド・公園・堤防

グラウンド・公園・堤防部分で確認された植物種は、表1のとおりで、樹木類は上流部 2科2種、下流部 5科5種、草本類は上流部 8科18種、下流部 8科18種であった。

堤防の斜面から河岸近くの遷移部まで、一般的に河川敷といわれるところは、主にグラウンドや公園に利用されている。したがって、人の踏みつけに強いシバ、シロツメグサ、オオバコなどの植生がほとんどである。その他、ナズナ、ヘラオオバコ、ハマダイコン、スイバ、ヒメジオンなどがみられる。

堤防斜面の植生は、管理のために刈り取りが良く行われているため、単純な様相を示している。春にはハマダイコン、スイバ、アレチギシギシ、オオバコが繁茂し、夏から秋にはセイバンモロコシ、カラスムギ、シバなどが多くみられる。一方、樹木はほとんどが植栽で、ヒラドツツジ、キョウチクトウ、トベラなどが敷地境界線などに植えられている。

2. 河岸隣接帯

河川水路の潮間帯からグラウンド・公園の間に位置する河岸隣接帯は、人為的な影響が少なく、自然に近い状態のところが多い。河岸隣接帯の植物種は、樹木類は上流部 12科17種、下流部 17科21種、大師橋下流 10科10種であり、草本類は上流部 29科86種、下流部 29科83種、大師橋下流 10科27種であった。

ここでは、アシ、オギ、セイバンモロコシなどのイネ科の植物が多くみられる。なかでも水際には高さ2～3メートルのアシが最も多いが、続いてオギの群落が帯状に分布し、グラウンド等に近いやや乾燥したところでは、カラスムギ、カゼクサ、シバなどのほかに、セイタカアワダチソウ、ノゲシ、ハルジオン、ヨモギなどのキク科の植物が繁茂している。また、自然の状態に近いため、タデ科、バラ科、マメ科などの雑草がきわめて多く存在している。

アシの大群落は、多摩川の景観を代表するもので鳥類や昆虫類の重要な生活環境をつくっている。アシは環境に対する適応力が高く、地下水位が高い埋立地や宅地にも侵入して群落をつくる。

一方、より安定した河岸隣接帯には面積は狭くないが河畔林が形成され、大木になっている樹木も見られる。種類としては、オニグルミ、タチヤナギ、トウネズミモチ、エノキ、タケ類などが多くみられる。また、人によって植えられたと考えられる樹木類も散見される。

3. 潮間帯

潮間帯は満潮位と干潮位の間に位置する場所でアシ（ヨシ）を主とする抽水植物が繁茂する塩性湿地と土砂が堆積して植生のない干潟がある。塩性湿地は河岸部分のすべてに存在しており、干潟の大規模なものは大師橋直上流と六郷水門付近に存在している。塩性湿地のほとんどはアシ群落である。一部にガマの群落（上流部のテトラポッド地点）、イグサがあり、その他、重要種であるイセウキヤガラの群落（六郷水門下流のポンプ場地先）がわずかに存在している。

潮間帯は、アシ等の作用により汚濁物の沈降を促進し、河水の浄化に役立っているとともに、干潟では底生生物の活動や外気との接触によって河水の浄化能力は特に大きくなっている。したがって、魚類、底生生物の生息環境、そしてそれらを餌とする鳥類を含む生態系が良好な形でつくられている貴重な場所になっている。

潮間帯・塩性湿地での植物種は、草本類で上流部 3科3種、下流部 2科2種が確認された。

2. 4 本調査 生物調査 <野鳥>

専門家2名による5月、8月、11月、2月の4回の調査時に観察された野鳥の記録をまとめた。参考までに他の調査員の確認記録を追記した。

大田区自然観察路「川と干潟のみち」で観察された野鳥



カワウ



アオサギ



ウミネコ



チュウヒ



オオバン



オオヨシキリ



コアジサシ



コチドリ



タシギ



ツグミ



ツツドリ



ノスリ



カンムリカイツブリ



セイタカシギ



カルガモ



カワラヒワ



ムクドリ



ハクセキレイ



ユリカモメ (夏羽)



ユリカモメ (冬羽)



キジバト



トビ

2018年度「川と干潟のみち」鳥類調査 確認された種名表

			春(4月)調査		夏(7月)調査		秋(10月)調査		冬(1月)調査	
			専門調査	他の調査員報告	専門調査	他の調査員報告	専門調査	他の調査員報告	専門調査	他の調査員報告
カイツブリ目	カイツブリ科	カイツブリ	2						2	
		カンムリカイツブリ	2				2		7	確認
		ハジロカイツブリ							3	
ペリカン目	ウ科	カワウ	44	確認	278	確認	503	確認	17	確認
コウノトリ目	サギ科	アオサギ	7	確認	10	確認	12	確認	8	確認
		ダイサギ	14		7	確認	8			
		コサギ	20	確認	18	確認	8	確認		
タカ目	タカ科	ミスゴ					2		1	
		トビ	3				5	確認	6	確認
		チュウヒ							2	確認
		オオタカ							2	
		ノスリ					1		1	
	ハヤブサ科	テヨウゲンボウ					1			
カモ目	カモ科	オシドリ					1			
		ヒドリガモ					6	確認	87	確認
		コガモ	16				7		46	確認
		マガモ					2		2	
		カルガモ	12		16		29		16	
		オナガガモ					7		40	
		ホシハジロ					1		16	
		キンクロハジロ	6						231	確認
		スズガモ	50		1				204	
ウミアイサ							8			
ツル目	クイナ科	オオバン	16				10		44	確認
チドリ目	セイタカシギ科	セイタカシギ					12	確認	14	確認
		チドリ科	イカルチドリ						4	
	シギ科	コチドリ	1	確認	5					確認
		タシギ	14						3	
		イソシギ	3	確認	1		5	確認	4	確認
		トウネン	7							
		キョウジョシギ		確認						
		アオアシシギ					2	確認		
		ウミネコ			37	確認	17	確認		
	カモメ科	カモメ	1						6	
		セグロカモメ					5		3	
		オオセグロカモメ			2		1			
		ユリカモメ	21				30	確認	137	確認
コアジサシ		19	確認							
大型カモメの仲間						1				
ハト目	ハト科	キジバト	6		3	確認	9	確認	5	
カッコウ目	カッコウ科	ツツドリ					1			
スズメ目	ヒバリ科	ヒバリ					1			
	ツバメ科	ツバメ	9	確認	13	確認				
	セキレイ科	ハクセキレイ	5		1		19	確認	13	確認
		タヒバリ							1	
	ヒヨドリ科	ヒヨドリ	3		1		43	確認	35	
	モズ科	モズ					5	確認	2	確認
	ヒタキ科ツグミ亜科	ジョウビタキ						確認	1	
		イソヒヨドリ						確認		
		ツグミ	3						8	
	ヒタキ科ウグイス亜科	ウグイス					1		2	確認
		オオヨシキリ	5	確認	5					
		セッカ				確認				
	シジュウカラ科	シジュウカラ	1	確認	5	確認	4		4	確認
	ホオジロ科	ホオジロ							1	
		アオジ					2		5	
		オオジュリン					4		7	
	アトリ科	カワラヒワ	8		3		8		8	確認
ハタオリドリ科	スズメ	41	確認	100	確認	194	確認	179	確認	
ムクドリ科	ムクドリ	67	確認	20	確認	78	確認	29	確認	
カラス科	オナガ	1		2					確認	
	ハシボソガラス	7	確認	5	確認	15	確認	8	確認	
	ハシブトガラス	9		4		19		11		
		ドバト	68	確認	93	確認	223	確認	145	確認

今回の「川と干潟のみち」の調査は、六郷橋から五十間鼻までの多摩川最下流域の左岸を調査区域として実施した。河川敷の大部分はグラウンドや公園として利用されていて、川岸には干潟やヨシ原が広がっている。大師橋上流には若干の樹林が存在している。

2018年度の鳥類調査は4月28日、7月17日、10月23日、1月21日の4回にわたり個体数カウントを実施した。その結果として記録された鳥類は、4回の調査の総計で10目25科59種および外来1種であった（最新分類は日本鳥学会編日本鳥類目録第7版であるが、過去の記録と比較するため同目録第6版に準拠して集計した）。

2009年度（平成21年度）に行われた前回の「川と干潟のみち」の調査区域は、今回とは若干異なり六郷橋から大師橋までと萩中公園が含まれている。4回の調査の総計で11目25科55種および外来3種が記録されている（2009年度調査報告書の原文では12目26科58種となっているが、外来種や飼育種の扱いを調整した）。

今回と前回の調査結果とを比較すると、種類数ではさほど大きな変移はないように見える。しかし、種類構成に注目するとかなりの相違が見られる。今回は調査区域に萩中公園が含まれないため、樹林性のコゲラ、メジロ、オナガなどが記録されなかった。また草地性のセッカは、前回は四季を通して記録されたが、今回は記録されていない。その一方でタカ目は前回の1種（トビ）から今回は5種（ミサゴ、トビ、チュウヒ、オオタカ、ノスリ）に増えている。また、留鳥のヒバリやモズと渡り途中のツツドリが今回は記録された。今年度の調査を四季毎に比較すると、種類数が最多になったのは冬季1月21日の44種（+外来1種）であった。この日はキンクロハジロ231羽、ついでスズガモ204羽、ユリカモメ137羽が優占種となっている。7月と10月の調査ではカワウとスズメが優占し、4月の調査ではムクドリとスズガモが優占している。

調査は六郷橋～六郷水門、六郷水門～大師橋、大師橋～五十間鼻の3区間に分けて行った。そのうち特に大師橋～五十間鼻の区間は河川敷が狭く、川岸にわずかな草地と干潟があるだけであった。当然のことながら、樹林性や草地性の鳥種は少なく、記録されたほとんどが水鳥類であった。

今年度の調査で記録された鳥類59種には、東京都レッドリスト2010年版（東京都の保護上重要な野生生物種）に指定されている種も数多く含まれている。記録された鳥類のうちで、東京都の区部において絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）とされている種は、オシドリ、セイタカシギ、コアジサシ、ミサゴ、チュウヒ、オオタカ、ノスリ、チョウゲンボウである。ついで、絶滅危惧Ⅱ類（VU）とされている種は、ダイサギ、コサギ、オオバン、コチドリ、イソシギ、モズ、ヒバリ、オオヨシキリである。さらに、準絶滅危惧（NT）とされている種は、カイツブリ、アオアシシギ、トウネン、トビ、オオジュリンである。

これらを総計すると、記録された鳥類のうち3分の1以上の種が、いずれかのカテゴリーで絶滅危惧種に指定されていることになる。絶滅に瀕した多くの種類の鳥類にとって、この多摩川最下流域は大変重要な生息環境となっているのである。

2. 5 本調査 生物調査 <昆虫類、その他>

今回の調査は、区民が身近に感じ、観察できる生き物を主な対象として行った。確認された生き物として昆虫類、爬虫類、哺乳類、節足動物（クモ）、甲殻類（カニ）、魚類、貝類、環形動物（ゴカイ）がいた。

これらの種類の生き物の調査にあたっては、特に保護柵の中に入ったり、植物をかき分けて地表近くを探したり、網を使って水中を探るなどの方法はとらず、調査コースを歩きながら観察された生き物を記録した。また、干潟に生息するカニ類については、調査員の確認に加えて、大師橋干潟を中心に定期活動を行っている「多摩川とびはぜ倶楽部」の観察報告に基づいている。

大田区自然観察路「川と干潟のみち」で観察された昆虫



ナガメ



ケラ



ベニシジミ



ホシホウジャク



シオカラトンボ



ウスバフユシャク



セグロアシナガバチ



オオヒラタシテムシ



ビワコカタカイガラモドキ



トノサマバッタ

大田自然観察路「川と干潟のみち」で観察された爬虫類



ニホンカナヘビ

大田区自然観察路「川と干潟のみち」で観察されたカニ類



アシハラガニ



クロベンケイガニ



ヤマトオサガニ



チゴガニ

2018年度「川と干潟のみち」生き物調査 確認された種名表

	科目	種名	4月調査	7月調査	10月調査	1月調査		
昆虫類	アゲハチョウ科	アオスジアゲハ ナミアゲハ						
	シロチョウ科	モンシロチョウ スジグロシロチョウ モンキチョウ キタキチョウ						
		シジミチョウ科	ベニシジミ ヤマトシジミ ウラナミシジミ ムラサキシジミ					
			タテハチョウ科	アカボシゴマダラ ツマグロヒョウモン タテハチョウの仲間				
				セセリチョウ科	イチモンジセセリ			
	スズメガ科			ホシホウジャク				
	シャクガ科	ウスバフユシャク						
	カマキリ科	オオカマキリ(卵しょう)						
	オンブバッタ科	オンブバッタ						
	バッタ科	ショウリウウバッタ トノサマバッタ イナゴの仲間						
		オンブバッタ科	オンブバッタ					
		ヒシバッタ科	ヒシバッタの仲間					
	コオロギ科	エンマコオロギ ミツカドコオロギ ツツレサセコオロギ						
		カネタタキ科	カネタタキ					
		ヒバリモドキ科	マダラスズ シバズ					
	キリギリス科		クビキリギリス					
	ケラ科	ケラ						
	カメムシ科	ウズラカメムシ ナガメ						
	アオバハゴロモ科	アオバハゴロモ						
	ハゴロモ科	ベッコウハゴロモ						
	ヨコバイ科	ツマグロヨコバイ オオツマグロヨコバイ						
		カタカイガラモドキ科	ビワコカタカイガラモドキ					
	アブラムシ科	アブラムシの仲間						
	セミ科	アブラゼミ クマゼミ ニイニゼミ ミンミンゼミ						
		オニヤンマ科	オニヤンマ					
		ヤンマ科	ギンヤンマ					
		トンボ科	アキアカネ ウスバキトンボ シオカラトンボ					
	シデムシ科		オオヒラタシデムシ					
	コガネムシ科		マメコガネ					
	コメツキムシ科	コメツキムシの仲間						
	テントウムシ科	ナナホシテントウ ナミテントウ						
	ハムシ科	ルリハムシ						
	スズメバチ科	セグロアシナガバチ オオスズメバチ						
	ハキリバチ科	ハキリバチの仲間						
	ミツバチ科	キムネクマバチ(クマバチ)						
	ガガンボ科	ガガンボの仲間						
	ハナアブ科	ナミハナアブ アシトハナアブ ホソヒラタアブ						
		節足動物	クモの仲間 コマチグモの仲間 ナガコガネグモ ジョロウグモ					
			爬虫類	トカゲの仲間 カメの仲間				
	ニホンカナヘビ ミシシippアカミミガメ							
	哺乳類	イヌの仲間 モグラの仲間 コウモリの仲間	ホンドタヌキの溜め糞(アシ原に) アズマモグラのモグラ塚(グラウンドに) アブラコウモリ					
		貝類	ヤマトシジミ ソトオリガイ カワザンショウ ムラサキイガイ					
			環形動物	ゴカイ科	ゴカイ			
	甲殻類		カニの仲間	クロベンケイガニ ベンケイガニ カクベンケイガニ アシハラガニ ケフサイソガニ コメツキガニ チゴガニ ヤマトオサガニ				
				魚類	ボラ コイ ニゴイ			

今回の「川と干潟のみち」調査では、昆虫類62種、爬虫類2種、クモ3種、カニ8種、魚類3種が記録された。哺乳類は、ホンドタヌキ、アズマモグラの生息の痕跡が確認された。

今年度の昆虫類、その他動物の調査は4月、7月、10月、1月に実施した鳥類調査に並行して、コース上で確認された種を記録したものである。徹底した搜索や採集による調査ではないので、記録された種はさほど多くはない。しかしながら、一般の人々が自然観察路として利用した際に容易に出会える生物種を把握するという点では、意義のあるものと言えよう。

今回の調査では、昆虫類28種、甲殻類5種、魚類3種、爬虫類2種、哺乳類2種(痕跡)が記録された。環境が単調であるため、他所と比べて昆虫類の種類数はさほど多くはない。その中ではチョウ・ガ目(鱗翅目)がやや多く14種であった。トンボ目はわずか3種に留まった。

その他、甲殻類カニの数種が川岸や干潟に多数生息し、干潮時の自然観察の対象になりうると興味深く思われた。哺乳類については動物の本体は目撃できなかったが、その生息の痕跡として、ホンドタヌキの溜め糞とアズマモグラの塚(盛り土)を記録した。また、調査時間帯が日中のため姿は観察していないが、アブラコウモリも多数生息していると推測される。魚類や貝類など水生動物の種類も豊富であろうが、陸上からの目視での観察には限界があり、確認できたものはわずかであった。

2. 6 協働調査 <区民参加による調査普及活動>

2000年に実施された区民参加による「身近な生き物調査」がベースになっている区民協働調査は、身近に生息する生き物を、身近に観察（調査）することを目的にしている。そのため、調査方法も野鳥、植物の専門調査以外は担当調査員からの報告の範囲にとどめているが、それが却って一般にもわかりやすく、親しみやすいものになっている。

区民協働調査観察会は、このような調査を知ってもらうとともに、一部調査に参加してもらうことで、関心を高める目的がある。また、自然観察路に親しんでもらい、実際に歩いてもらうために制作された大田区自然観察路シリーズパンフレットのPRを兼ねて行われている。

第1回 区民協働調査観察会

日 時：2018年8月11日（日）10：00～12：00

天 候：晴

場 所：萩中集会所、大師橋干潟

講 師：片岡和夫（多摩川とびはぜ倶楽部代表）、ほか

参加者：一般募集による区民、親子 22名（大人13名、子ども9名）

実施状況：

萩中集会所に集合。多摩川とびはぜ倶楽部の片岡講師から大師橋干潟の生きものの説明と干潟での注意点などを聞いた後、全員で多摩川へ移動。大師橋干潟では、はじめに参加者全員でシジミを集め、水質浄化実験の準備をする。その後、それぞれが泥地をシャベルで掘り起こしたり、石を裏返したりしてカニを探す。参加者の捕まえたカニを使い、種類やその生態についての説明があった。





第2回 区民協働調査観察会

日 時：2018年12月9日（日）10:00～12:15

天 候：晴

場 所：萩中集会所、大師橋干潟～六郷橋緑地周辺

講 師：小野紀之（地域パートナーシップ支援センター）

参加者：一般募集による区民、親子 14名（大人12名、子ども2名）

実施状況：

夏の干潟でのカニを中心とした生きもの観察やシジミを使った水の浄化実験に対して、冬は水辺の野鳥、特に冬鳥のカモ類、カモメ類の観察を行った。冬が多摩川河川敷は、風も強く申し込みは少なめだが、環境に関心の高い人が比較的多く、最近では夏の観察会などに参加したリピーターの親子などの参加が増えている。

室内での野鳥観察のポイント説明のあと、多摩川河川敷へ移動。夏の参加者もいたため、本羽田公園の展望台から干潟とそこにいる野鳥を観察。その後上流の六郷水門に向けて移動。途中、アオサギ、ダイサギ、カワウ、オオバンのほか、ユリカモメやセグロカモメを観察する。最終観察地点の六郷橋緑地、水路の干潟ではコガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、カルガモなど多くのカモ類とセイタカシギをゆっくり観察することができた。





大田区自然観察路「川と干潟のみち」の生物・植物についての区民協働調査
実施報告書

発行 2019年3月

一般社団法人 地域パートナーシップ支援センター

東京都大田区仲六郷1-33-5
